

講 義 要 項

経済社会政策専攻
国際経済コース

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
国際経済論特研(International Economics Advanced Research)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
コア科目	2	1.2	前期	金 6	柴田 茂紀 (Shigeki SHIBATA) E-mail sshiba@oita-u.ac.jp 内線 7715
授業の概要	理論・政策・歴史など幅広い観点から、現在の「グローバル経済を見る眼」を養う。				
具体的な到達目標					
目標1	現代に至る国際貿易システムの変遷を理解できる。				
目標2	国際経済に関する問題点がいかに解決されてきたのか、または解決されずに残されているのか分析する。				
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	世界の景気循環 (以下、テキスト)				
3	総合商社と専門商社				
4	世界の通関関係 (GATT・WTO 体制)				
5	世界の通関関係 (貿易協定)				
6	世界経済前後の日本貿易				
7	東アジアの生産ネットワーク				
8	中間のまとめとテスト				
9	国際貿易の基礎理論、その1				
10	国際貿易の基礎理論、その2				
11	国際経済統計の分析方法、その1				
12	国際経済統計の分析方法、その2				
13	為替レートの決定メカニズム				
14	受講者の事例研究報告 (その1)				
15	受講者の事例研究報告 (その2)				
アクティブ ラーニング	課題図書を読みながら自分自身の疑問を自分で調べ、発表することで理解を深めていきます。			その他の 授業の工夫	学生同士の発表・質疑応答を通じて、説明力も 養成していきます。
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	課題図書を事前に理解しながら読んでくること(15h)			
	事後学修	授業中の疑問点を自分で調べ、次回以降の質問項目や議論に備えること(15h)			
教科書	第1回目の授業で指示します。				
参考書	必要に応じて紹介します。				
成績 及び 評価 割合 の方法	評価方法			割合	
	平常点			60%	
	レポート			40%	
注意事項	・受講者の発表を中心に授業を進めます。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名(科目の英文名)					専攻・コース
開発経済論特研(Development Economics Advanced Research)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
コア科目	2	1.2	前期	火3	木村 雄一 (Yuuichi KIMURA) E-mail ykimura@oita-u.ac.jp 内線 7689
授業の概要	農村低所得地域での貧困削減プロジェクトに対しての評価を可能にするため、農業家計の行動、所得向上についての理論・実証分析のフレームワークを学ぶ。				
具体的な到達目標					
目標1	各箇所の論点を把握し、述べるができること。				
目標2	諸問題が起きるメカニズムを理解すること。				
目標3	原因の理解の上に立ち、政策案を考えることができること。				
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	本科目の動機付けについて				
2	序章 途上国の貧困・脆弱性問題				
3	第1部 貧困の経済分析の基本				
4	1 貧困の概念と計測				
5	2 家計レベルの所得貧困の決定要因				
6	3 経済成長、不平等、貧困のトライアングル				
7	4 貧困削減政策の評価				
8	第2部 貧困・脆弱性の動学的マイクロ分析				
9	5 経済格差移動と脆弱性の概念				
10	6 不確実性下の動学家計モデルに基づく貧困・脆弱性分析				
11	7 脆弱性の諸指標				
12	8 貧困の一時的要因と慢性的要因への分解				
13	9 所得ショックに対する消費の「過度の反応」				
14	10 途上国の貧困・脆弱性分析の今後				
15	まとめの議論、論点の整理				
アクティブ ラーニング	毎回のマテリアルをもとに予習して論点を把握した上で参加し、議論を行う。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	予習 (マテリアルを読む)			
	事後学修	論点の整理と理解			
教科書	黒崎 卓 2009. 貧困と脆弱性の経済分析 (シリーズ 開発経済学の挑戦2) 勁草書房.				
参考書	黒崎 卓, 開発のミクロ経済学理論と応用 一橋大学経済研究所叢書 2001 (岩波オンデマンドブックス 2016)				
成績評価 の方法 割合	評価方法			割合	
	予習、参加と議論			100%	
注意事項					
備考	本編のスケジュールには入っていないが、国際秩序・覇権、武力紛争に関する国際政治のトピックを同時並行的に参照するかもしれない。				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
証券市場論特研 I (Securities Market Advanced Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
コア科目	2	1.2	前期	月 7	金 珍奎 (Jingyu KIM) E-mail kim@oita-u.ac.jp 内線 7690
授業の概要	本授業では、証券市場の様々な問題を取り上げ、国民経済と証券市場の関係について学習します。株式・債券市場の分析に重点を置きつつ、投資信託やデリバティブなどについても学習します。				
具体的な到達目標					
目標 1	証券市場の仕組みと機能がわかるようになる。				
目標 2	アジアの証券市場をはじめ、世界の証券市場の現状と課題を把握できるようになる。				
目標 3	株価の形成について分析ができるようになる。				
目標 4					
目標 5					
目標 6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	株式投資の二大流派				
3	株式市場のバブルについて				
4	アメリカの株式市場①				
5	アメリカの株式市場②				
6	ファンダメンタル分析①				
7	ファンダメンタル分析②				
8	テクニカル分析①				
9	テクニカル分析②				
10	証券投資理論①				
11	証券投資理論②				
12	世界の株式市場について				
13	韓国の株式市場について				
14	中国の株式市場について				
15	総まとめ				
アクティブ ラーニング	参加学生の発表をつうじ、学習内容を確認する。また、質疑応答や議論をつうじ、意見を交換するとともに、プレゼンテーションのスキルを向上させる。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	テキストの発表準備をする (20h)。			
	事後学修	学習内容の復習を行う (20h)。			
教科書	バートン マルキール (著), 井手 正介 (翻訳) 『ウォール街のランダム・ウォーカー』日本経済新聞社、最新版。				
参考書	1. 川比英隆 『テキスト株式・債券投資』中央経済社、2006 年。 2. 『証券投資の思想革命』東洋経済新報社、2006 年。ピーター・L. バーンスタイン (著), 青山 謙 山口 勝業 (翻訳)				
成 績 評 価 の 方 法 割 合	評価方法				割合
	発表				50%
	質疑応答 レポート				30% 20%
注意事項	授業の参加者は、毎回指定された課題を提出する必要があります。課題については、ガイダンスのときに説明します。				
備考	レポートの課題についてもガイダンスのときに説明します。				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
国際金融論特研 I (International Finance Advanced Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
コア科目	2	1.2	前期	火 6	小笠原 悟 (Satoru OGASAWARA) E-mail ogasawara-satoru@oita-u.ac.jp 内線 7713
授業の概要	本講義では、学部レベルの国際金融の基礎的な理論を学び、国際金融の制度、歴史、現状について理解できるようにすることが狙いです。				
具体的な到達目標					
目標 1	基礎理論をベースに国際金融の現状を理解する				
目標 2	自ら課題を見つけ、調査報告できる				
目標 3					
目標 4					
目標 5					
目標 6					
授業の内容					
1	国際収支と為替相場				
2	経常収支と国際貸借				
3	国際経済におけるマクロ経済政策				
4	国際金融のトリレンマ				
5	マクロ経済政策の国際協調				
6	為替相場決定要因				
7	為替相場決定モデル				
8	小論文中間報告				
9	為替介入と外貨準備				
10	通貨統合と最適通貨圏の理論				
11	国際通貨体制				
12	通貨危機の種類とその応用				
13	国際金融アーキテクチャー				
14	まとめ				
15	小論文発表				
アクティブ ラーニング	国際金融に関わるテーマで小論文を作成、発表します。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	担当以外の学生も予習としてテキストを下にレジメを作成していただきます(30h)。			
	事後学修	授業での学びを生かし、小論文を作成の準備をします(15h)。			
教科書	小川英治/岡野衛士『<サビエンティア>国際金融』東洋経済新報社 2016年				
参考書	P.R.クルーグマン、M.オブスフェルド『国際経済学—理論と政策下 金融編』原著第10版 丸善出版 平成29年 授業中にも適宜指示します。				
成績 評価 評価 割合 の方法	評価方法		割合		
	レジメの提出		25%		
	授業での貢献		25%		
	小論文		50%		
注意事項	各自作成したレジメは授業終了後 Moodle から提出していただきます。				
備考	無断欠席は厳禁です。受講生のバックグラウンドや授業の進行状況によって内容を変更する場合があります。新型コロナウイルス感染拡大の状況によってはオンライン授業となります。				
リンク	URL				
担当教員の 実務経験の有無	○				
教員の 実務経験	エコノミスト、為替ストラテジスト				
教員以外で 指導に関 わる実務 経験者の 有無					
教員以外 の指導に 関わる実 務経験者					
実務経験 をいかした 教育内容	外資系金融機関でエコノミスト、為替ストラテジストとしての経験を有する教員が、グローバルな視点から実体経済と金融の関係について解説する。				

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
EU 政治経済論特研 I (The Europeanization of the EU Economy Advanced Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	金 6	デイ スティーブン (Stephen Day) E-mail srday@oita-u.ac.jp 内線 6676
授業の概要	The goal of this module is to provide an insight into the dynamics associated with the historical and contemporary development of the European Union and the processes of integration. The main focus will be upon key events and actors that have been responsible for driving political and economic integration. In addition, we will take a look at the evolution of the theoretical ideas that have accompanied this story.				
具体的な到達目標					
目標 1	Develop an awareness and understanding of the EU				
目標 2	Ability to comment on the process of European integration/disintegration in a critical and cogent manner				
目標 3	Build the necessary confidence to engage with and analyze events				
目標 4	Think theoretically and conceptually about EU politics and economics				
目標 5	Recognize the contested nature that accompanies the process of EU integration				
目標 6					
授業の内容					
1	Introductory overview - Thinking about political change				
2	Introductory overview - What is the EU?				
3	The EU in the 2020s - The political situation across the member states				
4	The EU in the 2020s - Key issues affecting the EU				
5	Historical dimension - Calls for European integration prior to 1945				
6	Historical dimension - The Schuman Plan and the European Coal and Steel Community (ECSC)				
7	Case Study - What were the norms and values that drove the 'founding fathers'?				
8	From the European Economic Community (EEC) to the European Union (EU)				
9	EU Enlargement				
10	Theoretical and Conceptual Overview				
11	Federalism and functionalism				
12	Neo-functionalism and supranationalism				
13	Liberal intergovernmentalism and 'New' liberal intergovernmentalism				
14	Alternative theories of integration				
15	Is the future one of integration, differentiated integration or disintegration?				
アクティブ ラーニング	There will be a number of individual and small-group task-based exercises. This will include: quizzes, exercises in applying theory to real-world scenarios and evaluating and deconstructing a wide range of media reports.				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 の目 安	準備学修	30 hours - In order to consolidate the class-based material read specific chapters from the text book as well as a number of newspaper articles that will be provided in class.			
	事後学修	15 hours - Reflect on the issues raised in the class discussion by writing a brief academic diary to be presented at the next class. Work towards researching, structuring and writing the assigned essay.			
教科書	Hubert Zimmermann and Andreas Duer (eds.) Key Controversies in European Integration, Palgrave 2021 (Third Edition)				
参考書	Journal of Common Market Studies. Additional material will be distributed during the module				
成 績 評 価 の 方 法	評価方法			割合	
	Essay			70%	
Class-based exercises			30%		
注意事項	The determination to study the European Union (EU), in English, and a willingness to participate in classroom based activities				
備考	A willingness to engage in critical thinking as we make use of a plethora of different source material: newspaper, academic journals, video and web-based material etc.				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
アジア経済論特研(Economic Development in Asia Advanced Research)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	木 6	木村 雄一 (Yuuichi KIMURA) E-mail ykimura@oita-u.ac.jp 内線 7689
授業の概要	<p>経済的に繁栄し、政治的自由も手に入れた民主的な政治体制がある一方、政治的な利害対立（たとえば、EU 内の東西、米中冷戦、中国中心部と周辺（ウイグル、チベット、モンゴル）、また紛争や大規模な殺戮（バスク独立運動、アイルランド独立運動、バルカンや中央アジアの諸民族、ミャンマー独裁と民族紛争、アフリカやラテンアメリカの非民主政治体制と宗教的過激派や反政府ゲリラ）は歴史上数多く見られるし、現代および現在においても世界のあらゆる場所で観察される。政治対立や紛争問題の根幹は、政治権力と国民の間の合意、つまり何が正当な政府であるかについての合意形成が成立するかしないか、民族間や国民の集団間での利害が一致するか対立するか、などの国家形成や政治体制形成の問題と見られる。この時間は、アフリカの国家・政治体制の形成について、ベイツなどの政治学の視点から開発問題を学ぶ。</p>				
具体的な到達目標					
目標1	各箇所の論点を把握し、述べるができること。				
目標2	諸問題が起きるメカニズムを理解すること。				
目標3	原因の理解の上に立ち、政策案を考えることができること。				
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	オリエンテーション				
2	序章 個別と普遍：政治研究者のアフリカへの眼差しから				
3	1 方法論：開発研究と地域研究の架橋を目指して				
4	2 権力と収奪：新政治経済学の再検討				
5	2 家計レベルの所得貧困の決定要因				
6	2 農業と政府：穀物土地生産性とその決定要因				
7	3 農業と政府：穀物土地生産性とその決定要因				
8	3 農業と政府：穀物土地生産性とその決定要因				
9	4 民族と近代：難問としての「部族」主義				
10	4 民族と近代：難問としての「部族」主義				
11	5 希少性と「国民」：独立の見果てぬ夢				
12	5 希少性と「国民」：独立の見果てぬ夢				
13	6 対話と国家：21世紀のための覚書				
14	6 対話と国家：21世紀のための覚書				
15	まとめ				
アクティブラーニング	毎回のマテリアルをもとに予習して論点を把握した上で参加し、議論を行う。				その他の授業の工夫
時間外学習の内容と時間の目安	準備学習	予習（マテリアルを読む）			
	事後学習	論点の整理と理解			
教科書	高橋基樹 2010. 開発と国家 アフリカ政治経済論序説 勁草書房.				
参考書					
成績評価の方法	評価方法			割合	
	予習、参加と議論			100%	
注意事項					
備考	本編のスケジュールには入っていないが、国際秩序・覇権、武力紛争に関する国際政治のトピックを同時並行的に参照するかもしれない。				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済史特研 I (Economic History Advanced Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	木 7	市原 宏一 (Koichi ICHIHARA) E-mail ich@oita-u.ac.jp 内線 7719
授業の概要	近代世界システム論や環境史をめぐる論議動向を概観しつつ、ヨーロッパにおける近代社会の形成過程を諸地域・諸国家の結合する世界的なシステムのレベルで把握するという、社会経済史的な考察方法を理解する。				
具体的な到達目標					
目標 1	先行研究の整理と史資料の読解				
目標 2	修士論文作成を可能とする力の育成				
目標 3					
目標 4					
目標 5					
目標 6					
授業の内容					
1	ヨーロッパ工業化についての研究概観				
2	ヨーロッパ工業化についての研究概観				
3	ヨーロッパ工業化についての研究概観				
4	工業化についての国家・地域各論				
5	工業化についての国家・地域各論				
6	工業化についての国家・地域各論				
7	環境史についての研究概観				
8	環境史についての研究概観				
9	環境史についての研究概観				
10	環境史についての地域各論				
11	環境史についての地域各論				
12	環境史についての地域各論 世界システム論についての研究概観				
13	世界システム論についての研究概観				
14	世界システム論についての研究概観				
15	世界システム論についての研究概観				
アクティブ ラーニング	授業課題に関連する報告要旨づくりなどに取り組み、複数の先行研究についての調査と文献リスト づくり等を行う			その他の 授業の工夫	
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	課題に関して、先行研究などの調査などを行ったうえで、要旨を作成する。5 h			
	事後学修	教員およびほかの院生からの指摘を踏まえて、報告要旨の修正を行い、さらに先行研究などの調査などを加える。5 h			
教科書	外国語文献を使用するが、講義の際に説明する。				
参考書	関連する文献を講義の際に紹介します。				
成績 評価 の 方 法 割 合	評価方法			割合	
	授業における報告 最終レポート			40% 60%	
注意事項					
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース	
西洋経済史特研 I (Economic History of western Europe Advanced Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース	
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員	
選択	2	1.2	前期	金 7	城戸 照子 (Teruko KIDO) E-mail tkido@oita-u.ac.jp 内線 7946	
授業の概要	ヨーロッパの前近代=封建社会の社会経済構造を、貨幣の観点から解明する。					
具体的な到達目標						
目標1	西洋の前近代社会の歴史の知識を増やす					
目標2	ヨーロッパの貨幣の種類や造幣権について、知識を深める					
目標3	西洋前近代社会の造幣に関連する金属加工業や鋳業の在り方を知る					
目標4	貨幣を交換手段として成立する経済関係を確認する					
目標5	貨幣が権威と権力のシンボルである世界を知る					
目標6	英語のテキストを読むことに慣れる					
授業の内容						
1	前近代西洋・中世の歴史のアウトラインを知る					
2	中世西洋の商業活動の中心イタリア半島の貨幣の多様性を知る (~10世紀)					
3	中世西洋のイタリア半島の貨幣の多様性を見渡す (10~15世紀)					
4	ヨーロッパ東部の金貨の意味と種類を知る (ローマ時代)					
5	ヨーロッパ東部の金貨の意味と種類を知る (ビザンツ帝国)					
6	中世のヨーロッパとイスラームの関係を知る					
7	ヨーロッパの東側の隣人、中東イスラーム世界の金貨					
8	デナリウスと高麗銀貨を考える					
9	高麗銀貨の機能					
10	貨幣の形と銀のインゴットやバーの形					
11	現代社会につながる一般的な貨幣の機能を考える					
12	交換手段と市場					
13	価値尺度と取引文書					
14	価値保存の「価値」の多様性					
15	権威と権力の象徴としての「価値」					
アクティブ ラーニング	英語テキストを予習して日本語に訳す練習をする。それを土台として相互に討論の練習をする。				その他の 授業の工夫	
時間外学 修の内容 と時間 の 目 安	準備学修	英文テキストの予習とキーワードの選定 (1h)。				
	事後学修	英文テキストの和訳の作成 (2h)				
教科書	Italy and Early Medieval Europe. Papers for Chris Wickham, Oxford, University Press, 2018					
参考書	講義中に指定する。					
成 績 評 価 の 方 法 割 合	評価方法				割合	
	毎回のゼミにおける報告内容と回数。				50%	
	他のゼミ生への質問と討論などにおける発言内容と回数。				20%	
	学期末レポート (課題は本人が選択)。				30%	
注意事項	欠席する場合は、なるべく事前にメールで連絡する。Moodle を利用してテキスト配布などをする。					
備考						
リンク	URL					
担当教員の実務経験の有無						
教員の実務経験						
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無						
教員以外の指導に関わる実務経験者						
実務経験をいかした教育内容						

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
西洋経済史特研II (Economic History of western Europe Advanced Research II)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	木 4	城戸 照子 (Teruko KIDO) E-mail tkido@oita-u.ac.jp 内線 7946
授業の概要	この講義では、ヨーロッパ封建社会の貨幣について、造幣権者と造幣の現場、両替商など利用者の視点など、重層的な観点から、中世の社会経済関係を再考します。農地としての土地を仲立ちとした領主=農民関係、封土としての土地を仲立ちとした領主=封臣関係が中世社会の根幹たとしても、貨幣使用と造幣は、常に土地を中心とする経済と同時に存在します。最も基本的な社会構造と貨幣使用の関係を理解することを、授業のねらいとします。さらに、古代から中世初期、中世初期から中世盛期への移行とその原動力について、経済関係から考察するのを授業のねらいの第2点目とします。				
具体的な到達目標					
目標1	英文論文を講読し、分析・検討して、議論を深めます。				
目標2	西洋中世社会の基本構造のモデルを理解することを、到達目標とします。				
目標3	そのために外国語文献の一定程度の読解能力の向上とキーワード理解を深めます。				
目標4	キリスト教という信仰が日常生活を規定する具体例を考察します。				
目標5	ヨーロッパとビザンツ帝国との関係を再考します。				
目標6	ヨーロッパとイスラームの関係を再考します。				
授業の内容					
1	中世社会経済史				
2	カロリング王朝からイタリアコムーネ社会へ				
3	中世の造幣				
4	領主=農民関係の再考				
5	商業と通貨				
6	修道院の特権				
7	司教と小教区				
8	造幣権者の多様性				
9	貴金属鉱山				
10	古代ローマから中世へ				
11	イスラームの貨幣				
12	ビザンツ帝国の景観				
13	貨幣1-金貨				
14	貨幣2-銀貨				
15	まとめ-貨幣史のアプローチ				
アクティブ ラーニング	古銭学 web の専門 web サイトや博物館学の収蔵物の検索を課題として課します。検索作業を通じて、モノとしての歴史史料を分析する研究手法に対する知識を深めます。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 目安	準備学修	英文テキストの解読と日本語訳の際の歴史用語のキーワードを書き出し、歴史事典的な叙述を調べて基礎的知識を深めます。			
	事後学修	英語の web サイトなどで、引用箇所に出てきた歴史的な人物・文化・制度などを調べ直します。			
教科書	Medieval European Coinage, 1. The Early Middle Ages(5th-10th centuries), Grierson, Philip& Blackburn, Mark, Cambridge University Press, Cambridge, 1986.				
参考書	講義中に紹介する。				
成績 及び 評価 割合 の方法	評価方法			割合	
	予習及び報告内容などの講義での平常点 学期末のレポート			80% 20%	
注意事項	予習は必ずしてくる。欠席の際は必ず連絡をいれること。				
備考	できればTOEICなどの受験も含め、英語で勉強する意欲を忘れないようにしましょう。				
リンク	URL				
担当教員の 実務経験の有無					
教員の 実務経験					
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無					
教員以外 の指導に 関わる実務 経験者					
実務経験を いかした教育 内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
多文化共生社会特研(Advanced Research on Multiculturalism)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	前期	木 4	久保田 亮 (Ryo KUBOTA) E-mail yuralria@oita-u.ac.jp 内線 7730
授業の概要	グローバル化が進展する現代世界において、わたしたちが生活する地域社会や職場・教育環境も着実に多文化化・多民族化しています。また、そうした現状のなかで「多文化共生」ということばをキーワードとする、社会問題の解決に向けた取り組みが様々なレベルで実施されています。以上の点を踏まえ、この授業では次の3点を学習する機会を提供します。①多文化化・多民族化する日本社会の現状と対応を多角的に理解すること、②多文化共生と各自の専門領域のつながりについての理解を深めること、③ディスカッション、プレゼンテーション、論文執筆など、多文化化が進展する社会環境・職場教育環境を生き抜いていくためのコミュニケーション力を身につけること。				
具体的な到達目標					
目標1	授業で学習した概念・事例について正確かつ詳細な説明ができる。				
目標2	現代日本の地域社会や教育/職場環境の多文化化および多民族化の状況とそれが生み出す諸問題について理解する。				
目標3	多文化共生という概念について説明ができる。				
目標4	ディスカッション、プレゼンテーション、資料収集、論文執筆など、多文化的環境で特に必要とされる知識や技法を身につける。				
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス (授業概要、単位認定基準、スケジュールの説明)				
2	ディスカッションの技法				
3	グループディスカッション (1)				
4	プレゼン・論文執筆の技法 (1)				
5	プレゼン・論文執筆の技法 (2)				
6	多文化共生の意味とその実態 (1)				
7	多文化共生の意味とその実態 (2)				
8	グループディスカッション (2)				
9	多文化化する地域社会				
10	多文化化する職場・教育環境				
11	グループディスカッション (3)				
12	日本社会の多民族化 (1)				
13	日本社会の多民族化 (2)				
14	日本社会の多民族化 (3)				
15	グループディスカッション (4)				
アクティブ ラーニング	授業では複数回、授業内容に関するグループディスカッションを実施します。議論に必要な文献渉 猟を事前に行うことを推奨します。			その他の 授業の工夫	授業で用いる資料配布、課題の提出、連絡事項 の周知などにMoodleを使用します。
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	配布資料、参考文献に対して目を通し、予習する (15h).			
	事後学修	ノートなどを利用して、授業での学習成果についての確認作業を行うとともに、配布資料、ノート、参考文献を用いて復習する (15h)			
教科書	教科書は指定しませんが、必要に応じて授業内で指示します。				
参考書	授業中に適宜紹介し、必要に応じて配布します。				
成 績 評 価 の 方 法 割 合	評価方法			割合	
	ミニッツコメントの提出状況・記載内容			30%	
	グループディスカッションへの積極的な参加および議論への貢献			20%	
	課題の提出状況および内容評価			10%	
	学期末レポート			40%	
注意事項	※この授業では、受講生が積極的に発言することを強く求めます。※授業内容は、必要に応じて変更する場合があります。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
異文化間コミュニケーション論特研(Advanced Research on Cross-cultural Communication)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	火 6	久保田 亮 (Ryo KUBOTA) E-mail yuralria@oita-u.ac.jp 内線 7730
授業の概要	国境や地域を超えてヒト・モノ・情報が絶えず行き交う現代世界において、地域社会、職場環境のグローバル化・多文化化が急速に進んでいます。こうした現代社会においては、文化的背景の異なる人びととの交流や協働を首尾良く成し遂げるスキル、生まれ育った文化とは異なる文化的環境の中で生き抜く知識や技術の習得が、必須となりました。この授業では、異文化間コミュニケーション論で取り扱われる4つの鍵概念-文化、コミュニケーション、コンテキスト、権力-についての理解を深めつつ、コミュニケーション現場の事例を検討することで、グローバル社会を生き抜くためのスキルセットを習得します。また、グローバル人材に必須とされるコミュニケーション力向上のために、アカデミックライティングやディスカッションのトレーニングを行うことで、大学院生に求められるスキルにさらに磨きかける機会を提供します。				
具体的な到達目標					
目標1	授業で学習した概念を正確かつ詳細に説明できる。				
目標2	コミュニケーション現場における諸要素を意識した上で、文脈に応じた対応を柔軟にできるようになる。				
目標3	ライティング、ディスカッション、プレゼンテーションに必要なとされるスキルセットを習得する。				
目標4	多文化化・グローバル化する社会の特質を理解する。				
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス (授業概要や授業の進め方の説明)				
2	ライティングの技法				
3	プレゼンテーションの技法				
4	ディスカッションの技法				
5	グループディスカッション (1)				
6	文化・アイデンティティ・コミュニケーション				
7	コミュニケーションとコンテキスト				
8	ことばと非ことば				
9	メディア・権力・コミュニケーション				
10	グループディスカッション (2)				
11	異文化交流の意義				
12	文化的他者との協働				
13	日本人の異文化観				
14	グループディスカッション (3)				
15	期末レポート・口頭発表				
アクティブラーニング	授業では複数回、授業内容に関するグループディスカッションを実施します。議論に必要な文献歩併を事前に行うことを推奨します。また、グループディスカッションの準備として幅広く文献歩併を実施することが必要となります。			その他の授業の工夫	授業で用いる資料酒布、課題の提出、連絡事項の周知などにMoodleを使用します。
時間外学修の内容と時間の目安	準備学修	与えられた課題に関する資料を精読するなどの予習を行う (15h)			
	事後学修	授業内容について整理し、その結果をミニッツコメントとして提出する (15h)			
教科書	教科書は使用しませんが、必要に応じて授業内で指示します。				
参考書	授業内容に関わる書籍、論文については適宜紹介します。				
成績評価の方法	評価方法		割合		
	グループディスカッションへの積極的な参加および議論への貢献		40%		
	課題の提出状況および内容評価		20%		
	学期末課題		40%		
注意事項	口頭発表、課題提出などは責任を持って行ってください。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の实務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済学史特研(History of Economics Advanced Research)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	前期	月5	金子 創 (Soh KANEKO) E-mail skaneko@oita-u.ac.jp 内線 7701
授業の概要	<p>経済学は、異なる価値観を有する主体の間で生じる相互作用の帰結を(1)「予測」し、またその帰結について(2)「評価」することを主要な興味としている。それぞれに関して、多くのバリエーションが歴史上に存在し、今なお論点は発展・拡大している。本科目では、そうした歴史的な理論上の試行錯誤を経済学方法論の観点から整理し、種々のバリエーションの相互の関連性を探ることで、経済学についての理解を深める。</p>				
具体的な到達目標					
目標1	経済学が何を明らかにしようとしてきた／しているか、を説明できるようになる。				
目標2	経済学の発展の方向性を建設的に批判できるようになる (もしそうしたいのであれば)。				
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス、経済学史と経済学方法論				
2	基礎的な用語について				
3	J.S. ミルの方法論的伝統				
4	演繹と帰納、それぞれの役割				
5	厳密ではない法則とは				
6	実証主義と反証主義				
7	(古典的な)科学的説明と経済学				
8	実在論と反実在論				
9	ポパー的伝統とラカトシュの軌回				
10	フリードマンと道具主義				
11	古典的プラグマティズムと経済学				
12	サミュエルソンの操作主義				
13	市場経済へのアプローチ法				
14	モデルによる現実の理解				
15	まとめ				
アクティブ ラーニング	<p>・学生に報告を課し、議論の時間を設ける。・コメントペーパーに疑問点を記入してもらおう。</p>				<p>その他の 授業の工夫</p> <p>・LMS (Moodle) を活用する。</p>
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	・報告準備 (授業内演習として割り当てる、15h)			
	事後学修	・復習 (15h) ・課題提出 (15h)			
教科書	・教科書は指定しない。・配布資料を用いる。				
参考書	・D.W. Hands "Reflection without Rules," Cambridge University Press, 2001. ISBN978-0521497152				
成績評 価の 方法 割合	評価方法				割合
	授業内演習 (報告、ディスカッション)				50%
	課題				50%
注意事項	※この授業では、受講生が積極的に発言することを強く求めます。※授業で扱うトピックは、受講生の関心に応じて調整する場合があります。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済思想史特研(History of Economic Thought Advanced Research)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	金 7	金子 創 (Soh KANEKO) E-mail skaneko@oita-u.ac.jp 内線 7701
授業の概要	<p>経済学の教科書的な枠組みであるところの価格理論では、(その典型的な分析において)要素所得分配(賃金、利潤)は所与の生産技術から決定されるが、そうした分析結果はしばしば市場原理にもとづく公平な資源配分の帰結と見なされてきた。他方、アダム・スミスを端緒とする古典派(の定式化)では、要素所得分配が内生的に決定されることを前提としておらず、(何らかの意味での)権力関係による資源配分の遂行を想定する。それぞれの枠組みの評価は、経済のどういった側面に着目するかによって変わるが、それぞれの分析の展開は特定の思想・価値判断と結びついていると考えられる。本科目では、それぞれの分析の特徴を把握するとともに、背景に存在する思想と合わせて考察する。</p>				
具体的な到達目標					
目標1	経済学における分析結果を注意深く検討できるようになる。				
目標2	分配に関する理論的扱いを学ぶと共に、その解釈に結びついた思想を理解する。				
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	競争と長期均衡				
3	生産過程の定式化について:2財ケース				
4	生産過程の定式化について:複数財ケース				
5	新古典派的生産関数				
6	ネオ・リカーディアンの生産理論				
7	授業内演習				
8	競争均衡				
9	厚生経済学の基本定理				
10	ネオ・リカーディアンの分配理論				
11	技術選択の導入				
12	ケンブリッジ資本論争				
13	古典派の問題意識				
14	授業内演習				
15	まとめ				
アクティブラーニング	・学生に報告を課し、議論の時間を設ける。・コメントペーパーに疑問点を記入してもらう。			その他の授業の工夫	・LMS (Moodle) を活用する。
時間外学修の内容と時間の目安	準備学修	・報告準備(授業内演習として割り当てる、15h)			
	事後学修	・復習(15h) ・課題提出(15h)			
教科書	・教科書は指定しない。・配布資料を用いる。				
参考書	・R.O'Donnell "Adam Smith's Theory of Value and Distribution," Palgrave Macmillan, 1990. ISBN978-1349109104 ・H.D. Kurz and N. Salvadori "Theory of Production," Cambridge University Press, 1995. ISBN978-0521588676 ・A. Opocher and I. Steedman "Full Indust				
成績評価の方法	評価方法			割合	
	授業内演習(報告、ディスカッション)			50%	
	課題			50%	
注意事項	※この授業では、受講生が積極的に発言することを強く求めます。 ※授業で扱うトピックは、受講生の関心に応じて調整する場合があります。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名(科目の英文名)					専攻・コース
多言語共生社会特研 I (Multilingual Symbiotic Societies Research I)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	前期	月2	包 聯群 (Lianqun BAO) E-mail blianqun@oita-u.ac.jp 内線 7724
授業の概要	<p>本特研では、「多文化共生社会」(2006年)の実現「理念」の視点から、多言語多文化社会とは何かを学び、それらを理解することによって、異文化への理解を深め、コミュニケーション能力を向上し、多様な研究実践活動、特に多言語サービスなどを通して、地域社会に貢献できることの学びを目指す。</p>				
具体的な到達目標					
目標1	「多言語多文化共生社会」とは何かを理解すること。				
目標2	多言語と異文化社会を理解すること。				
目標3	コミュニケーション能力を向上できること。				
目標4	どのような実践活動ができるかを学ぶ。				
目標5	地域社会に貢献できる力を身に付くこと。				
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	「多言語多文化共生社会」とは何か				
3	多言語社会日本—その現状と課題				
4	多言語使用状況				
5	国語と日本語政策				
6	多言語政策—複数の言語の共存社会				
7	多言語景観社会				
8	ディスカッション・口頭発表				
9	多言語支援 (因縁)				
10	移民の母語教育について				
11	多言語能力と外国語産業 (ビジネス)				
12	言語福祉という視点から				
13	言語意識とコミュニケーション				
14	多言語コミュニティ				
15	ディスカッション・口頭発表				
アクティブラーニング	毎回の内容を事前に予習し、関連書籍、論文を読むことによって、授業で学ぶ知識を定着させる。また、授業にてディスカッションを行い、意見交換をし、応用に向けて知識の共有を実現し、新たなアイデアの創出に努めることにする。				その他の授業の工夫
時間外学習の内容と時間の目安	準備学習	関連課題を予習すること。(2h)			
	事後学習	関連課題を復習すること。(1.5h)			
教科書	1.『多言語社会日本 その現状と課題』。多言語化現象研究会編、2013年、三元社。 2. その他(資料配布)。				
参考書	1.『多言語社会がやってきた』(世界言語政策Q&A)。河原俊昭/山本忠行編、2004年、くろしお出版。 2.『世界の言語政策 第3集 多言語社会を生きる』。山本忠行/河原俊昭編、2010年、くろしお出版。				
成績評価の方法	評価方法		割合		
	授業にてディスカッション、宿題完成度		50%		
	期末レポート		50%		
注意事項	無断欠席をしないこと。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無	<input type="radio"/>				
教員の实務経験	3・11 東日本大震災の時、InterFMにて「災害言語サービス」を行った経験がある。(中国語で緊急情報の翻訳(or 英語)・アナウンスなどをしたことがある)。				
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無	<input type="radio"/>				
教員以外での指導に関わる実務経験者	ゼミ生と共に大分・別府の言語景観を調査し、多言語(中国語の繁体字・簡体字)パンフレットを作成し、大分市と別府市の政府関係者に寄贈したことがある。				
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
多言語共生社会特研Ⅱ (Multilinguistic Symbiotic Societies Research Ⅱ)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	月6	包 聯群 (Lianqun BAO) E-mail blianqun@oita-u.ac.jp 内線 7724
授業の概要	本特研では、「多言語共生社会」への理解を一層深めることを目標とする。そのため、世界の多言語社会を対象とし、言語の多様性とは何か、多言語状況の諸相、多民族多言語政策、言語使用などを把握し、グローバル化社会への理解を深め、多言語社会への適応能力を向上していくことを目指す。				
具体的な到達目標					
目標1	「多言語共生社会」への理解を一層深めること。				
目標2	言語の多様性を理解すること。				
目標3	多言語状況の諸相を知ること。				
目標4	多民族政策の知識を増やすこと。				
目標5	グローバル化する社会への理解を深めること。				
目標6	多言語社会への適応能力の向上に役に立つ。				
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	多言語状況の比較				
3	言語の多様性とは何か				
4	多言語状況と少数言語				
5	ヨーロッパの多言語状況				
6	ロシア・ブリヤートの多言語状況の諸相				
7	中国の多言語状況の諸相				
8	ディスカッション・口頭発表				
9	新疆におけるオイラド・モンゴル人の文字改革問題				
10	インド近現代における文字論争				
11	インドネシアにおける多言語状況と「言語政策」				
12	インドネシアにおける少数民族語地域の言語使用と実態				
13	都市国家シンガポール—英語の支配の中の多言語主義				
14	「言語権」からみた日本の言語問題				
15	ディスカッション・口頭発表				
アクティブラーニング	毎回の内容を事前に予習し、関連書籍、論文を読むことによって、授業で学ぶ知識を定着させる。また、授業にてディスカッションを行い、意見交換をし、視野を広げ、分析能力を向上していく。				その他の工夫
時間外学習の内容と時間の目安	準備学習	関連課題を予習すること。(2h)			
	事後学習	関連課題を復習すること。(1.5h)			
教科書	1.『多言語主義再考 多言語状況の比較研究』。砂野幸穂編、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所発行、2012年、三元社。 2. その他(資料配布)。				
参考書	1.『ヨーロッパの多言語主義はどこまでできたか』、『ことばと社会』(別冊1)、『ことばと社会』編集委員会・編、2004年、三元社。 2.『世界の言語政策 第3集—多言語社会を生きる—』。山本忠行/河原俊昭編、2010年、くろしお出版。				
成績評価の方法	評価方法			割合	
	授業にてディスカッション、宿題完成度			50%	
期末レポート			50%		
注意事項	無断欠席をしないこと。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験をいかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済統計論特研 II (Economic Statistics Advanced Research II)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
選択	2	1.2	後期	火2	中本 裕哉 (Yuya Nakamoto) E-mail y-nakamoto@oita-u.ac.jp 内線 7677
授業の概要	国民経済計算(SNA: System of National Accounts)は経済活動を測定する国際的な体系である。本講義では国民経済計算(SNA)を中心に、それらの数値がどのような社会経済現象の実態を捉えているのかを理解する。特に、産業連関表の仕組みや産業連関モデルについて学習し、産業連関分析手法を修得する。				
具体的な到達目標					
目標1	国民経済計算体系に基づく経済分析と経済事象の考察ができる。				
目標2	産業連関分析を修得する。				
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	国民経済計算体系 I				
3	国民経済計算体系 II				
4	産業連関表 I				
5	産業連関表 II				
6	産業連関モデル I				
7	産業連関モデル II				
8	産業連関モデル III				
9	産業連関モデル IV				
10	多地域産業連関モデル I				
11	多地域産業連関モデル II				
12	多地域産業連関モデル III				
13	多地域産業連関モデル IV				
14	環境勘定				
15	まとめ				
アクティブ ラーニング	担当者による報告後、受講者全員で議論する。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	参考書などを必要に応じて予習する。(15h)			
	事後学修	授業内容の整理。(20h)			
教科書	教科書は指定しない。				
参考書	Ronald E. Miller and Peter D. Blair (2009) 'Input-Output Analysis: Foundations and Extensions' Cambridge University Press.				
成績評 価の 方法 割合	評価方法			割合	
	報告			50%	
	レポート			50%	
注意事項	線形代数の知識が必須です。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
国際経済学演習 I～IV(International Economics Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		柴田 茂紀 (Shigeki SHIBATA) E-mail sshiba@oita-u.ac.jp 内線 7715
授業の概要	理論・政策・歴史など幅広い観点から、現在の「グローバル経済を見る眼」を養う。				
具体的な到達目標					
目標1	現代に至る国際貿易システムの変遷を理解できる。				
目標2	国際経済に関する問題点がいかに解決されてきたのか、または解決されずに残されているのか分析する。				
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	国際経済の基礎理論を学ぶ1				
2	国際経済の基礎理論を学ぶ2				
3	国際経済の基礎理論を学ぶ3				
4	国際経済の基礎理論を学ぶ4				
5	国際経済の基礎理論を学ぶ5				
6	国際経済の基礎理論を応用する1				
7	国際経済の基礎理論を応用する2				
8	国際経済の基礎理論を応用する3				
9	国際経済の基礎理論を応用する4				
10	国際経済の基礎理論を応用する5				
11	国際経済の事例分析を行う1				
12	国際経済の事例分析を行う2				
13	国際経済の事例分析を行う3				
14	国際経済の事例分析を行う4				
15	国際経済の事例分析を行う5				
アクティブ ラーニング	基礎・応用・事例分析の相互関係から、研究対象の理解を深めていきます(15h)				その他の 授業の工夫 演習内外での研究発表を通じて多様な質疑応答を経験するため、多面的な理解が可能になります。(15h)
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	課題図書を読み込みと発表準備			
	事後学修	発表の振り返り			
教科書	第1回目の授業で指示します。				
参考書	必要に応じて紹介します。				
成績 及び 評価 割合 の方法	評価方法			割合	
	平常点			60%	
	レポート			40%	
注意事項	・受講者の発表を中心に授業を進めます。 ・理論的な知識が不十分な場合は、個別に課題を出します。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
国際金融論演習 I～IV(International Finance Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		小笠原 悟 (Satoru OGASAWARA) E-mail ogasawara-satoru@oita-u.ac.jp 内線 7713
授業の概要	前半は金融、国際金融に関する専門書の輪読を中心にすすめ、各自の修士論文執筆の準備をします。後半には各自の修士論文のテーマに沿った論文を取り上げ検討します。				
具体的な到達目標					
目標1	国際金融の諸理論を理解し、問題意識を持って論文作成に取り組むこと				
目標2					
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンスー修士論文作成に向けて				
2	研究テーマと研究計画の確認				
3	論文作成のための調査方法と分析方法				
4	中間報告の準備 (報告会の日程に合わせる)				
5	専門分野の文献の輪読とディスカッション (5～14回)				
6	総括				
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
アクティブ ラーニング	テキストを輪読しながら現代の国際金融に関わる問題点を検討します。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	授業の前までに必ず指定テキストを読み、レジメを作成すること (30h)。			
	事後学修	授業での学びを生かし、修士論文作成の準備をすること (15h)			
教科書	ガイダンスで指示します				
参考書	適宜、指示します				
成績評価 及び評価 の方法 割合	評価方法			割合	
	授業での報告			50%	
	授業への貢献度			50%	
注意事項	無断欠席は厳禁です。				
備考	受講生のバックグラウンドや授業の進行状況によって内容が変わる場合があります。				
リンク	URL				
担当教員の 実務経験の有無	<input type="radio"/>				
教員の 実務経験	エコノミスト、為替ストラテジスト				
教員以外で 指導に関 わる実務 経験者の 有無					
教員以外 の指導に 関わる実 務経験者					
実務経験 をいかした 教育内容	外資系金融機関でエコノミスト、為替ストラテジストとしての経験を有する教員が、グローバルな視点から実体経済と金融の関係について解説する。				

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
証券市場論演習 I～IV(Securities Market Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		金 珍奎 (Jingyu KIM) E-mail kim@oita-u.ac.jp 内線 7690
授業の概要	受講者の研究テーマに基づき、授業を進めます。				
具体的な到達目標					
目標1	修士論文の作成に必要な力を養うことにあります。				
目標2					
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	修士論文のテーマに沿って進める。				
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
アクティブ ラーニング	発表と議論を積極的に行う。			その他の 授業の工夫	
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	テキストの発表準備をする (20h)。			
	事後学修	学習内容の復習を行う (20h)。			
教科書	受講者と相談して決めます。				
参考書	『証券投資の思想革命』東洋経済新報社、2006年。ピーター・L. バーンスタイン(著), 青山 譲 山口 勝業(翻訳)				
成績 評価 の方法 割合	評価方法			割合	
	発表			100%	
注意事項					
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
EU 政治経済論演習 I ~IV(The Europeanization of the EU Economy Seminar I ~IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		デイ スティーブン (Stephen Day) E-mail srd@oita-u.ac.jp 内線 6676
授業の概要	The goal of this seminar will be to analyze contemporary developments in the European Union as they happen. At the same time we will build a framework of understanding about the European project from an historical and contemporary perspective. Every two weeks, the focal point of the seminar will be an unfolding news story. We will subsequently explore the issues contained within that story as we think about the nature of the relationship between the EU and its Member States.				
具体的な到達目標					
目標 1	Develop an understanding of the EU in order to discuss events in a critical and cogent manner				
目標 2	Build-up a confidence to engage with and analyze events as they happen				
目標 3	Display an awareness and understanding of different perspectives towards the process of European integration				
目標 4	Develop an understanding of the intricacies of Brexit				
目標 5					
目標 6					
授業の内容					
1	Turbulent relations between the Member States and the European Union				
2	Assessing the pros and cons of European integration				
3	Issues relating to the oft-cited 'existential crisis' faced by the EU in recent years				
4	The rise of populism across the EU member states				
5	The EU in a global context – thinking about the EU's 'soft-power'				
6	The EU as a model for regional integration				
7	Using theoretical ideas to help our understanding of EU integration				
8	Parliamentary elections across the EU Member States and the impact of changes in national governments				
9	European Parliamentary elections				
10	Party politics at the national and European level				
11	Relations between the key institutions of the European Union				
12	The impact of the increased electoral strength of Eurosceptic political forces				
13	The UK and Brexit				
14	The process of Brexit negotiations				
15	The implementation and consequence of Brexit				
アクティブ ラーニング	As an interactive class there will be a number of individual and small-group task-based exercises. This will include: quizzes, exercises in applying theory to real-world scenarios and evaluating a wide range of media reports.				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	30 hours - In order to consolidate the class-based material read specific chapters from the text book as well as a number of newspaper articles that will be provided in class.			
	事後学修	15 hours - Reflect on the issues raised in the class discussion by writing a brief academic diary to be presented at the next class. Work towards structuring and writing the assigned essay.			
教科書	Michelle Cini and Nieves Pérez-Solórzano Borragán (Eds) European Union Politics 7th Edition, Oxford University Press, 2022 『「ブレグジット」という激震—混乱するイギリス政治』 スティーブン・デイ・カウ昌幸 共著 2021 年, ミネルヴァ書房 Learners will be provided with additional relevant material				
参考書	Journal of Common Market Studies				
成 績 評 価 の 方 法 割 合	評価方法			割合	
	Essay			40%	
	Portfolio			40%	
Class-based exercises			20%		
注意事項	This seminar will be conducted in English. Learners are strongly encouraged to take the classes entitled 'The Europeanization of the EU Economy – Advanced Research I&II'				
備考	A willingness to engage in critical thinking as we make use of a plethora of different source material: newspaper, academic journals, video and web-based material etc.				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済史演習 I～IV(Economic History Advanced Research Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		市原 宏一 (Koichi ICHIHARA) E-mail ich@oita-u.ac.jp 内線 7719
授業の概要	史資料に基づく先行研究成果の整理検討により、工業化前社会の社会経済的特徴を環バルト海世界のヒトと物の交流を題材として検証する。				
具体的な到達目標					
目標1	先行研究の整理と史資料の読解を行える				
目標2	文献史料と考古学資料の総合的な検討を行える				
目標3	修士論文作成の力を育める				
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	文献史料に基づく先行研究の整理 (1)				
3	文献史料に基づく先行研究の整理 (2)				
4	文献史料に基づく先行研究の整理 (3)				
5	文献史料に基づく先行研究の整理 (4)				
6	文献史料に基づく先行研究の整理 (5)				
7	文献史料に基づく先行研究の整理 (6)				
8	中間報告 (1)				
9	考古学資料に基づく先行研究の整理 (1)				
10	考古学資料に基づく先行研究の整理 (2)				
11	考古学資料に基づく先行研究の整理 (3)				
12	考古学資料に基づく先行研究の整理 (4)				
13	考古学資料に基づく先行研究の整理 (5)				
14	考古学資料に基づく先行研究の整理 (6)				
15	最終報告				
アクティブ ラーニング	授業課題に関連する報告要旨づくりなどに取り組み、複数の先行研究についての調査と文献リスト づくり等を行う、これらを通じて修士論文課題を設定する。			その他の 授業の工夫	
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	自身の関心に基づく課題に関して、先行研究などの調査、翻訳などを行ったうえで、要旨を作成する。5 h			
	事後学修	教員およびほかの院生からの指摘を踏まえて、報告要旨の修正を行い、さらに先行研究などの調査、翻訳などを加える。5 h			
教科書	自身の課題に適した文献を授業に際して設定する。				
参考書	関連する文献を講義の際に紹介します。				
成績評 価の 方法 割合	評価方法			割合	
	授業での報告			40%	
	最終報告			60%	
注意事項					
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関 わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に 関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
西洋経済史演習 I～IV(Economic History of Western Europe Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		城戸 照子 (Teruko KIDO) E-mail tkido@oita-u.ac.jp 内線 7946
授業の概要	演習のテーマとして、中世ヨーロッパの社会経済構造を説明するために、「貨幣」に注目する。造幣権力、造幣技術、貨幣の機能、貨幣の意匠と貨幣をめぐる同時代人の心性などをテーマとして、分析にとりかかる。授業では、テーマが明解な論文を複数読み、Web サイトを利用して、貨幣の現物の画像を多く見ることで、テーマの実像に接近する。				
具体的な到達目標					
目標1	ヨーロッパでの研究動向の調べ方に慣れる。				
目標2	英文論文の読み方に慣れる。				
目標3	web サイトを利用した検索に慣れる。				
目標4	日欧の貨幣をめぐる研究動向を知る。				
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	貨幣の機能1 交換手段1				
2	貨幣の機能2 交換手段2				
3	貨幣の機能3 交換手段3				
4	交換の場所1 中世の市場1				
5	交換の場所2 中世の市場2				
6	交換の場所3 中世の市場3 (イスラーム)				
7	貨幣の機能4 価値尺度1				
8	貨幣の機能5 価値尺度2				
9	貨幣の機能6 価値尺度3				
10	度量衡と貨幣1				
11	度量衡と貨幣2				
12	度量衡と貨幣3				
13	貨幣の価値保存1				
14	貨幣の価値保存2				
15	貨幣の価値保存3				
アクティブ ラーニング	報告レジュメを作り、討論することで内容の理解を深める (1h)。日本語テキスト、英語テキストの読解と、特に英語テキストの日本語翻訳テキストを作成し、ゼミ後に文章を改良する (1h)。			その他の 授業の工夫	
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	英語論文の読解			
	事後学修	英語論文を翻訳しキーワード理解を深める。			
教科書	A Cultural History of Money in the Medieval Age, ed. by Rory Mairsmith, Bloomsbury, 2019.				
参考書	黒田明伸 (2014) 『増補新版 世界システムの貨幣史』岩波書店、を参考書とする。日本語でのキーワードに慣れ、ヨーロッパと比喩対照するさいの、ユーラシアを中心とする貨幣史研究動向を知っておく。				
成 績 評 価 の 方 法 及 び 評 価 の 割 合	評価方法			割合	
	毎回のゼミでの報告と討論 日本語訳の論文テキストの作成			50% 50%	
注意事項	Moodle で、テキスト配布やゼミ予定の連絡をするので、こまめに見ておいてほしい。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
開発経済学演習 I～IV(Development Economics Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		木村 雄一 (Yuuichi KIMURA) E-mail ykimura@oita-u.ac.jp 内線 7689
授業の概要	経済発展、貧困削減についての開発経済学の研究を実行可能にするため、これらトピックの議論内容を把握し、研究方法として計量経済学の方法についても参照する。				
具体的な到達目標					
目標1	開発経済学の分野で、自ら研究テーマを設定、実証研究を遂行すること。				
目標2					
目標3					
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	経済発展、貧困削減についての文献を展望				
2	経済発展、貧困削減についての文献を展望				
3	経済発展、貧困削減についての文献を展望				
4	修士論文の問題設定、研究方法のための議論				
5	修士論文の問題設定、研究方法のための議論				
6	修士論文の問題設定、研究方法のための議論				
7	計量経済学、それを使った実証分析の方法				
8	計量経済学、それを使った実証分析の方法				
9	計量経済学、それを使った実証分析の方法				
10	経済発展、貧困削減などに関するサーベイ文献参照				
11	経済発展、貧困削減などに関するサーベイ文献参照				
12	経済発展、貧困削減などに関するサーベイ文献参照				
13	論文参照				
14	論文参照				
15	論文参照				
アクティブ ラーニング	常に議論を通じ、論点を発見し研究として実行する方法を考える。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 の目 安	準備学修	研究の論点の把握、マテリアルの内容把握。			
	事後学修	マテリアルから新たに得られた論点を研究の論点に反映するための論点整理。			
教科書	指定なし。				
参考書	World Development, Journal of Development Economics などの専門誌、その他、開発経済学、経済発展、貧困削減などの関連書籍。計量経済学については Fumio Hayashi 2000. Econometrics. Princeton University Press.				
成 績 評 価 の 方 法 割 合	評価方法			割合	
	準備、参加と議論			100%	
注意事項					
備考	この分野の書籍や論文には英語のものが多く、それらを読むことができれば望ましい。				
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
文化動態論演習 I～IV(Cultural dynamics Seminar I～IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		久保田 亮 (Ryo KUBOTA) E-mail yuralria@oita-u.ac.jp 内線 7730
授業の概要	文化人類学の観点から、現代社会を生きる人間の営みを理解する眼を養う。				
具体的な到達目標					
目標1	文化人類学の理論、方法論についての知識を深める。				
目標2	社会調査方法としてのフィールドワークの技術を習得する。				
目標3	それぞれの現場における人間の営みを資料に基づき考察できる。				
目標4					
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	文化人類学の理論 (1): 言語と文化				
3	文化人類学の理論 (2): 言語の多様性				
4	文化人類学の理論 (3): 生業				
5	文化人類学の理論 (4): 贈与経済				
6	文化人類学の理論 (5): 婚姻				
7	文化人類学の理論 (6): 家族・親族				
8	文化人類学の理論 (7): 性とセクシュアリティ				
9	文化人類学の理論 (8): 人種				
10	文化人類学の理論 (9): ヒトの生物学的差異				
11	文化人類学の理論 (10): エスニシティ				
12	文化人類学の理論 (11): 階級				
13	文化人類学の理論 (12): 国家				
14	文化人類学の理論 (13): 法と政治				
15	レポート発表とフィードバック				
アクティブ ラーニング	文献や調査資料に基づくディスカッションが中心の授業となります。			その他の 授業の工夫	授業で使用了論文・文字資料・映像資料などはmoodleに保存します。
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	指定された文献を精読し、授業での意見交換のための準備を行う (10h)			
	事後学修	授業でのディスカッションを踏まえ、関連する論文・書籍の渉猟を行い、トピックについての理解をさらに深める (10h)。			
教科書	授業内で指示します。				
参考書	必要に応じて紹介します。				
成績 評価 の 方 法 割 合	評価方法			割合	
	期末レポート			100%	
注意事項					
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
経済学史演習 I ~IV(History of Economics Advanced Seminar I ~IV)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		金子 創 (Soh KANEKO) E-mail skaneko@oita-u.ac.jp 内線 7701
授業の概要	本演習は経済学史に関する修士論文(もしくはその準備稿)の作成およびそれに必要な予備知識や研究手法の習得を目的とします。				
具体的な到達目標					
目標1	研究テーマを設定し、その重要性を説明できるようになる。				
目標2	先行研究を概観し、自身のテーマを適切に位置づけられるようになる。				
目標3	当該テーマに沿ったアプローチを選択できるようになる。				
目標4	問題意識および研究成果を説得的に表現するための能力を身につける。				
目標5					
目標6					
授業の内容					
1	課題や問題意識の所在の確認				
2	研究計画作成と文献収集				
3	先行研究レビュー、読解に必要な予備知識および研究手法の整理				
4	先行研究に関する研究ノート作成				
5	中間報告				
6	研究ノートの修正				
7	必要な分析の確認、準備				
8	分析の実施、実習				
9	分析の進捗状況の確認、議論				
10	論文執筆、議論				
11	論文執筆、議論、研究計画との整合性の確認				
12	論文の提出				
13	論文内容の報告準備				
14	最終報告				
15	内容の振り返りと論文の修正				
アクティブ ラーニング	毎回、作業のタスク(文献収集、レジュメ作成、報告準備、研究ノートなど)を設定し、それぞれのアウトプットの提出を求める。また、それに対して教員や他の受講生からコメントの機会を設ける。	その他の 授業の工夫	演習のために作成された資料を教員、受講生間でLMS(Moodle)などを通じて共有し、お互いに活用できるようにする。		
時間外学 修の内容 と時間の 目安	準備学修	毎回、設定されるタスクの取組み(20h)			
	事後学修	アウトプットに対する指摘、コメントへのリプライや内容の修正(25h)			
教科書	指定しない。				
参考書	適宜指示する。				
成績 評価 割合 の方法	評価方法			割合	
	報告と議論 研究ノート、論文			50%	
注意事項					
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					

授業科目名 (科目の英文名)					専攻・コース
多言語社会政策論演習 I~IV(Seminar I~IV of Multilingual Social Policies)					経済社会政策専攻 国際経済コース
必修選択	単位	対象年次	学期	曜・限	担当教員
必修	2	1.2	前・後		包 聯群 (Lianqun BAO) E-mail blianqun@oita-u.ac.jp 内線 7724
授業の概要	本演習では、とりわけ多言語・多文化共生社会とは何かを理解し、その上、社会言語学理論を把握し、研究及び地域社会活動(企業・観光・医療・災害言語サービス等)にそれらを如何に活かすかを学ぶ。また、院生の研究テーマにそって修士論文の指導を行う。				
具体的な到達目標					
目標1	多言語・多文化共生社会とは何かを理解すること。				
目標2	社会言語学理論を把握すること。				
目標3	地域社会活動(企業への言語サービス)を学ぶこと。				
目標4	地域社会活動(観光への言語サービス)を如何に活かすかを学ぶこと。				
目標5	地域社会活動(医療言語サービス)を理解すること。				
目標6	地域社会活動(災害言語サービス)を学ぶこと。				
授業の内容					
1	ガイダンス				
2	多言語共生社会とは何か				
3	多文化共生社会とは何か				
4	社会言語学とは				
5	日本と中国の社会言語学				
6	属性とことば				
7	言語行動				
8	言語生活				
9	言語接触				
10	言語変化				
11	言語意識				
12	言語習得				
13	言語計画				
14	言語政策				
15	まとめ				
アクティブ ラーニング	毎回の内容を事前に予習し、関連書籍、論文を読むことによって、授業で学ぶ知識を定着させる。また、授業にて発表をし、分析能力を向上していく。				その他の 授業の工夫
時間外学 修の内容 と時間 の目安	準備学修	関連課題を予習すること(2h)。			
	事後学修	関連課題を復習すること(1.5h)。			
教科書	1. 『社会言語学の展望』。真田信治編。2006年、くろしお出版。2. その他(資料提供)。				
参考書					
成績評 価の 方法 割合	評価方法			割合	
	授業にてディスカッション、宿題完成度			50%	
	期末レポート			50%	
注意事項	無断欠席をしないこと。				
備考					
リンク	URL				
担当教員の実務経験の有無					
教員の実務経験					
教員以外で指導に関わる実務経験者の有無					
教員以外の指導に関わる実務経験者					
実務経験を いかした教育内容					